

## エジプトの灌漑運営移管の動きにふれて

カイロの朝は雲が厚い。今にも降り出しそうな雲模様である。日中に十分に蒸発したナイル河の水が、朝の冷気の中で雲化しているのであろう。しかし、雨は降らない、次第に青空が広がって暑い日差しが差し込んでくる。沙漠の国、エジプトの水循環はナイルによって成り立っていることを実感する。エジプトでは、このような自然の水サイクルとともに、農業をはじめとする水利用の面でもナイルを抜きにしては語ることができない。ナイルは、同国の水資源の 97% を占めるといわれており、まさに「エジプトはナイルの賜物」なのである。

年間平均降雨量は 50mm にもとどかない沙漠の国とはいえ、農業は盛んである。人口 8,250 万人 (2011 年時点) に対して、ナイル河下流の大デルタ地域を中心とした約 330 万 ha の栽培農地を擁し、コムギ、コメ、トウモロコシ、サトウキビ等を主産物としている。コムギでこそ 50% 程度の自給率ではあるものの、コメやジャガイモ、綿花、柑橘類等は重要な輸出品となっている。しかし、これらの農業も 98% 以上は灌漑によるもので、そのほとんどはナイルを水源とする水路網によって成り立っている。このような灌漑王国にも時代の変化が押し寄せている。一つは年率約 2% で増え続ける人口に対する食糧確保のプレッシャーである、すなわち灌漑拡大への強い要請である。その一方で、同じく人口増加も一因として非農業セクターでの水需要量の増大にともなう灌漑農業セクターへの水需要抑制へのプレッシャーである。

ナイル河上流諸国での新たな水源開発が急速に進む中で、エジプトにとっての新規水資源開発の余地は極めて限られている。ナイルの水のさらなる有効利用は切実で、最大の利水セクターである灌漑部門に向けられた利水効率化への眼差しはかつてなかったほどに厳しい。しかし、財政難に悩むエジプト政府には灌漑行政支出の負担は重すぎて旧来のような行政主導の灌漑運営は限界にきている。行政にまかせっきりの灌漑運営が成り立たなくなっている。その打開策として、受益者が主体的に灌漑運営に参加していく灌漑運営移管 (WMT : Water Management Transfer) が積極的に進められている最中にある。

ナイルのような大水源に依存した灌漑システムでは、取水された水は幹線水路から二次 (支線) 水路、三次水路等を経て膨大な数の農家圃場へと配水さ

れていく。水は共同の天然資源であり、共同で分かち合うことから、各農家は何らかの形の水利組合をつくって水利用に対応している。WMT とは、これら水利組合にもっと灌漑管理・運営機能を移管していこうとするものである。今のエジプトでは、この WMT 推進の動きが活発であり、筆者の今回のエジプト滞在中も WMT 推進のための各階層の人々の能力向上に係るものであった。現地では、WMT が順調に進んでいるとまでは云い切れないが、重要な課題であることは実感できた。

大灌漑システムは、人体の血流が大動脈から中・小動脈、毛細血管へと分岐して各細胞に続いているように、各圃場を潤している。だからといって末端の細胞や人体部位 (末端利水者) は、心臓 (水源) から送られるままに血液 (水) をただ受け取るだけではなく、もっと全体システムの維持を意識して、上位組織の負担を軽くするよう機能すべきではないか、と WMT はいつているようである。末端利水者・利水組合にできること、求めるべきことに限りはあるが、身体全体 (灌漑システム全体) の存亡に係る事態であれば、何がしの負担や役割の分担は当然のことであろう。WMT の推進には様々な議論や問題もあるが、エジプトに止まらず大規模灌漑システムに依存する灌漑農業においては今後も重要な課題であることは間違いなからう。

エジプトは、今、政治的な危機に直面している。ジャスミン革命からの混乱も続く中、今年 7 月以降、現職大統領が解任され新たな臨時政権が立つなど、国内が二分される事態に陥ってまだ終息の兆しはない。政治に注目しがちであるが、この国の存立基盤である灌漑システムとその運営も大きな岐路にある。

(2013 年 7 月松島)



デルタ地帯の基幹灌漑システムをなす一幹線水路



WMT によりさらに主体的な管理・運営を目指す水利組合のメンバーらと取水ゲート